

## 『三四郎』とマードック先生

日傘 順子

夏目漱石作『三四郎』の三四郎と広田先生は、漱石とマードック先生の投影である。『三四郎』執筆から3年後の明治44年、20年前に別れたとき全く疎遠だった旧師マードック氏から「博士号辞退は君のモラル・バックボーンを有している証拠になるから目出度い」という内容の封書が届いた。そのことから追想的に、かつ現在進行形に書かれたのが『博士問題とマードック先生と余』である。そこには三四郎同様に、マードック先生を無意識の真実のうちに敬愛した漱石の姿がある。同じようにそんな漱石を心に留めたマードック先生がいる。二人はそれほど親しい間柄であった。ロンドン留学から帰った漱石は、マードック氏の消息を人伝に聞いて、先生が鹿児島島の第七高等学校で英語を教えていると知る。そして鹿児島から人が出て来るたびに「マードックさんはどうした」と尋ねないことはなかった、とある。そんな九州と東京の関係と、漱石がいた熊本とを合わせて『三四郎』の地理関係が生まれたのだろう。

スコットランドで希臘語ギリシヤの教師をしていたマードック氏 (Mr. James Murdoch 1856～1921) は、オーストラリアに渡り教師を続けたが、ジャーナリストとして中国視察へ出かけた帰りに九州の知人のところに寄って日本が気に入り、オーストラリアを引き上げて来日し、第一高等中学校（東京大学予備門）で英語を教えた。漱石はその当時の生徒であった。漱石が教授を受けた頃は、まだ日本化していない純然たるスコットランド語での講義や談話を見境なく遣られ、学生たちは烟に巻かれるのを分と心得ていて、先生も平然としていたとある。しかしその人格によって生徒からは苦情は出なかったともある。その状況下で、漱石は先生の自宅を訪ねるほど特に熱心に英語を勉強した。どんな英語の本を読んだらよかろうという漱石の問いに応じて、マードック先生は10種ほどの書名を書いた紙片を与えた。漱石はそれを即座に探して読み、手に入らなかったものはロンドンで買って全て読破したという。おそらく先生自身が重きを置いていなかっただろうメモに、それほど重きを置いた自分が可笑しい気がする。漱石は当時を回想している。またあるときはベインの『論理学』を読めといて先生が貸してくれたことがあり、それを通読するつもりで持ち帰ったが難しく返すのが延び延びになったという。これらのことは三四郎の広田先生宅訪問場面や、難しい本を借りて返しに行く場面に反映される。そしてマードック家訪問時に、先生が食事を中断して書棚から取り出した本を朗々と読んで「どうだ」と聞いたとき、一言も解らなかったから「それは英語ですか」と聞いたら「希臘の詩だ」と答えられた場面と、英語の表現にちんぷんかんぷんのことを希臘語さという表現がある (It is all Greek to me) というところは、与次郎が三四郎に「希臘語だ」という場面として使われている。また服装においても、マードック氏と広田先生は感覚的にどこか似ている。

そして漱石が得た最後の報知では、マードック氏は学校を辞めて高台で果樹栽培に余念がないとのことだった。それは『先生は「日本における英国の隠者」というような高尚な生活を送っているように思われた』という感想となる。マードック氏が教職を離れたのは1908年のことであるから、それは『三四郎』執筆中だったかもしれない。そうだとすれば「偉大なる暗闇」はまさにマードック氏のことだろう。 (2014.12.1)